

稻妻に御獄の勝の奇抜かな

八月二十五日 午前作品展覽會を開く、先生の講評あり、
亦青梅には、舞々の士ありて同しく作品を並びかゝぐ、到底我
等が敵にあらざる也

生れ出てたるは青き蠍蟬にて候なり

午後繪端書會と懇親會を開き、終つて大半歸途につく

おさらばの芒うなづき合にけり

八月二十六日 午後衆に後れて歸京す

去るときの桔梗を折るも一人かな

青梅講習會の所感

會員 宮澤汀煙

たる其口元、只憾むらくは眼光恰も大蛇の人を睨むが如き感あるのみ、この大蛇は、先生がツイ先達、御獄山上惡雲朦々たる内、既に／＼呑れんとしたるを危く逃かへられたりと云はれたるものとは申す迄もない、先生の洒落に至つては大々的奇抜にして、勢に乗じては奇語百出一吐億里の元氣をもてせらるゝが故、大抵の者は吹き飛ばされてアツト尻餅を搗くのみ。其罪なき洒落真の可笑味は、腹の底より馬なれどヒン／＼と出でては笑聲ドット起り、坂上階上も爲に破壊せんとする有様でありし、斯る面白き慈愛ある諸先生の膝下に、余等は今古比類なき尤も着實なる講習をなせしは、實に欣喜措く能はざる所である。

青梅町は聞きしに優れる閑雅なる所、町の傍らを流るゝ玉川の水清く、翠又濃やかにして、名所古跡にも乏しく無い。加ふる丸山諸先生の許に、三七廿一日間をば、尤も愉快に尤も嬉しく悲しくオツトドツコエ樂しく暮したのであるが、余は此間程深き或趣味を持つて暮した事は未だ嘗つて無いのである、この講習會の所感を述べるに付て、余は先第一に、大下丸山諸先生の風采をば、未だ御存じ無諸君の爲茲に記するの光榮を有する者と思ふ、大下先生は身長六尺有餘、大兵肥満の方、（汀鶯曰、實際は瘦せて糸の如くに候）顔に少許の痘痕あり、其目元口元の愛嬌は實にこぼるゝ許り、（又曰く愛嬌は昔はあつたが今は皆翻れて何も無之候）謹嚴なる内一種不思議に人を引き附けらるる魔力を有せらる、又丸山先生は四尺有餘の短身瘦骨の人、鼻下の長鬚はビンとひれつてガイゼル式、キツト一文字に引き締つ

■ 會員の寫眞の中央、白地の日本服に帽を冠り鬚を生してゐるのは大橋講師、向つて左の方に洋服の胸を開いてゐるのは眞野講師、同じく右の方の洋服で手に帽を持つてゐるのは大下講師。 ■ 寫眞版和氣靄々は坂上樓上の光景なり。